

お散歩を通じてまちで育てる

「まち保育」の視座

三輪律江

(大学教員)

1 「まち保育」とは何か

私の専門は、建築・都市計画、まちづくり、環境心理という分野です。その分野から、乳幼児期、学童期、青年期の子どもとまちとの関係に着目し研究テーマにしてきました。特に2007年頃からは、乳幼児の子どもたちが集積している場とまちとの相互関係に注目した調査研究や実践を行っています。

未就学児の子どもの育ちの代弁者とも言える保育施設は、単なる目的地への移動ではない日常的な外出を「お散歩」と表現して実施していること、身近な生活圏にある公園等の地域資

源の場所、子どもたちが好きなポイントなどを把握し、独自に「お散歩マップ」などに記載して日々の保育に活用している園もあること、そしてお散歩マップに示されている範囲はそれほど広域ではなく、しかし日常的にさまざまな地域資源を濃く深く活用している実態を明らかにしてきました。一方で、多くの保育施設は、立地する地域とのつながりの必要性を感じつつも地域との関係構築の仕方がわからないといった課題を抱えていることも明らかになってきました。

そこで、2012年度からいくつかの保育施設に伴走し、日常にお散歩をする小さな範囲のまちを、違ったテーマで繰り返し歩くことで

三輪律江 (みわのりえ)

横浜市立大学・教授。博士(工学)。代表著書に『孤立する都市、つながる街』(日本経済新聞社 2019年、共著)、『まち保育のスヌメ』(明文社 2017年、共著)等。

乳幼児期の子どもを真ん中に保育施設と地域のつながりを強めるさまざまな試み（「まち保育ワークショップ」）を実践してきました。それらの発想の経緯と実践ノウハウをまとめた書籍『まち保育のススメ』（三輪、2017）では、「まち保育」を以下のように定義しています。

「まち保育」は、子どもたちの生活をより豊かにするものです。それは、保育施設・教育施設の園外活動だけを指すではありません。まちにあるさまざまな資源を保育に活用し、まちでの出会いをどんどんつないで関係性を広げていくこと、そして、子どもを囲い込まず、場や機会を開き、身近な地域社会と一緒に、まちで子どもが育っていく土壌づくりをすること、を私たちは「まち保育」と呼んでいます。

2 子ども目線で、まちを捉え直し伝える

まちにはいろんなヒト、モノ、バシヨ、コトがあります。調査研究で収集したお散歩マップ

には、「この公園は秋にはドングリがたくさん落ちている」「この道は焼きたてパンのいい香りがする」「この陸橋からは車掌さんがよく見える」といった情報が記載されているものもあります。子どもたちが毎日のお散歩でまちを楽しんでいる様子が目に浮かびます。そこで、まち保育ワークショップでは、日頃のお散歩のように、大人たちもゆっくりじっくり保育施設周辺を子ども目線でまち歩きし、気になるモノやコトがあったら立ち止まってそのポイントで写真を撮ったり感想を記録したりして、あらためて見直すということから始めました。

また、幼児クラスの子どもたち向けには「キッズカメラマンワークショップ」も実施しました（写真下）。お散歩途中に楽しいもの、気になるものを見つけたら、子ども自身がインスタントカメラで撮影するというもの



▲「キッズカメラマンワークショップ」から。
（写真提供：まち保育研究会）

で、子どもたちが見つけたものと発見場所、その時に子どもが発した言葉を夕方には園内に掲示し、降園時に保護者も見られるようにしました。子どもたちは自分の撮った写真を自慢そうに保護者に教えていたりしたそうです。

活動を開始して2年目に、保育者がまちに受け入れられるようになったと強く実感し、ターニングポイントとなったまち保育ワークショップがありました。「ありがとうカード大作戦」というものです。ありがとうカードとは、毎日のお散歩で楽しませてもらっている各住宅の軒先にあるモノ（庭先の手入れされた花、実ると見て楽しんでいた実、子どもたちの大好きなキャラクターの置物など）の写真と、楽しませてもらってありがとうの気持ちを含めたメッセージを巡るといふ企画です。

元来、軒先の緑や花の手入れ、置物などは各

家が自身の敷地内で自らが楽しむためにやっていることですが、この行為が見知らぬ誰かに潤いを与えていたり、喜びを与えているのだとわかって、嫌な顔をする人は一人もいませんでした。むしろそれをきっかけに、自宅の庭でできた野菜を保育施設に届けてくれるようになったり、保育中ではない通勤時に保育者と挨拶を交わしたりと、日常の延長線上での双方の関係が深まったとも聞いています。

乳幼児期の子どもたちがお散歩するのはせいぜい 分〜1時間程度。それは本当にごく小さな範囲ですが、その範囲のまち全体・地域みんなが「さりげなく」小さな子どもとかかわれるようになり、まちに変化をもたらすことにもつながっていったのです。

©K“UqO\$”AG^“ë”«³ã¿ÓT’{
yÈ©K“UqO\$”Ä[ø TM†j--Z€q£

4 まち保育の四つのステージ

私が唱える「まち保育」とは、子どもの育ちを血縁関係だけでなく地域社会で育み共有するため、多様な主体を巻き込みながら地域資源を活用するまちづくりの手法論です。そこには、まちで育てる―まちで育つ―まちが育てる―まちが育つ、といった四つのステージを読み解くことができました。

小さな生活圏でも、日々まちに出かけ、まちのさまざまな資源に気づき、まちの人との挨拶等を通して触れあいながらまちの子どもとして育っていくことで、まちをよく知り、お気に入りの場所ができ、おのずとまちを舞台にして子どもが育つようになっていきました。小さな範囲の同じまちを違った視点で何度も歩くことで、地域のさまざまな組織や活動がつながっていき、交流の層も厚くなっていきました。さらには「○園の子」と認知されるようになり、まちの子どもとしての成長や安全に関心が及ぶようにも

なりました。

そして、まちに暮らすたくさんの人と顔見知りになっていくことで、保育施設が「住民」として地域に受け入れられているという保育現場の安心感にもつながりました。声掛けや見守りが自然に起こり、まち全体が子どもを育てる意識と共に、保育施設とまちがより自然に連携する体制を誘発していきました。

日々のお散歩をしている子どもたちは、むしろ日中まちに不在がちな保護者に比べれば、もうそのまちのエキスパートです。彼らを中心に、保育者も一緒になって、子どもの育ちにまちそのものが活かされ、まちにかかわっていくこと。それは、そのまちのコミュニケーションファンを生み出す、少し先のまちの未来を創ることに必要なはずです。

引用文献

三輪律江・尾木まり他『まち保育のススメーおさんぽ・多世代交流・地域交流・防災・まちづくり』
萌文社 2017年